

アストン氏の源語論を評す
梅澤和軒

(乾)

或者曰く、佛人の藝術と愛とるや、藝術と愛するにあらざして、此れと評價するも樂ひあり、而して批評の創作に代らむとる傾向ありて、現今佛文學の、最も趣味あり且つ重要あるものと爲と。佛文學の、實に批評の超過に苦めりと。獨、佛國に止まらず、モルトン氏の著、製本屋に至るや、彼、雜誌界を評して曰く、現時文壇の大事の、文學自身と評論とることあり。而して、評論の、因て以て存する所の、文學の領を奪はむとと。泰西評壇の高潮それ斯の如し。眞個に十九世紀の批評の時代あり、文學に於て、美術に於て、はたまた音樂に於て。

翻つて我國と見るに、東西感と同等とせざるにあらざ、所謂新聞雜誌の記者の、不律を呵し、形管を嘗め、毎月毎日、營々此れ務む。誠に聖代の美觀

にして、一見賀すべきが如きも、而も大和民族の
インナルマンと知るべき、文學史に至りては、冷
然捨て顧みず。這般の研究に冷淡なる、我國の學
者より甚しきありなし。會を此れあるも、或は汽車
旅行に喩へ、或は停車場に比する者、其の見の淺
く、其の識の陋さ、毫も怪むに足らざと雖も、闔
國の學者、齷齪として射利これ事とし、たえて力
行不惑の者あきに至りては、嗟乎、此れ文壇の慶
事からむや。購賄力なく、思索的ならざる今日の
讀書界に、眞の文學史と供する者あき、蓋し故
あきに非らざるも、評論の盛、徒に活版小僧と眩
せしむるは、未だ以て其の盛と鳴るに足らざ。此

れを泰西の評家に比するに、及ばざること遠し。
新條約實施せられ、列國日本の進歩と驚嘆しつゝ
ある間、日本の進歩の當然たるを示すべき文學史
は、アストン氏に依りてものせられたり。未だ絶
東の文化如何と知らざるもの、其の根柢の、遼且
つ遠なるを見て、私に三嘆したる者あるべし。是

に於てか、アストン氏の名聲籍甚、ロンドン¹の紙價爲めに騰し。ケーレーエゾドヴェルシ商會が、シ
ンガポール以東の爲め、別に横濱にて印刷したる、
又隆ありと云ふべし。

驚嘆したる批評多きが中に、「亞細亞の光」の著者
にして、「袈裟御前」の作者ある、サーエドサンア
ーノルド氏、此の書と評して云へらく、

日本の散文律語について、世人の捨てゝ顧みざ
る、否、むしろ、未だ知らざる主題に關して、
破天荒のものとして、轉、肯綮に當るものあ
り。彼の驚くべき天惠國の、美術、製造、工藝
の、いたく注意せられたるも、未だ一人の、博
く彼女の文學と論ぜべき、勇氣と手腕とを有す
る者なし。かく云へばとて、吾人の、バシール
チエンパレン君、ラフカザオヘルン君、及び其

の他の人々が、其の目的につくしたる、嘆ぜべ
き勞力と忘れたるにあらざ、されど、かゝる諸
大家の、首として賛同せらるゝあらむ。正しく

國語を知らざる聰明ある人と教へ、或いは大
日本と彼女の風俗、言語とを知れる人々と助け、
其の豫め、知れる事と構成調和せしめむに、
即ち其の起原より現時に至るまでの、日本文學
と窺はむとする研究者を助くるもの、其の本
國語以外何物も存せざると。此れゾアストン氏
が、博學倫なき冊子に於て、博引旁搜、辯明の
瞭然と結構の精美とに成功したる所以ある。斯
の如き勤勞を以て、氏の獨、日本及び日本研究と
好める人々に限らず、廣く文學界に不朽の事業
となしたり。而して、管見によれば、かくして
氏の彼女の文學に、いと譽ある確乎不拔の地位
と與へたり、云々

今や列國競々として、日本と知らむとぞ。此の時
に當りて、創見ある系統的の好著と以てその機關
店棧の宜と得たる、精研細閱の感すべき、此れと
邦人の作に比するに、比較的批評の妥當あると
見る、アーノルド氏が、口と極めて稱揚せる、決
して溢美にあらざり。

去歲余暑と避けて、房州に遊びたりき。一日「文
學」より抄録せる、アストン氏が日本文學論と讀
み、得たる所、得ぬ所あり、其の全篇と閲せむと
欲し、京に入りて後、諸同人を始め、最近英文學
通ある某M.A.に文して、「文學」と借らむとしたる
もえぞ。今歲孟夏始めて其の著と見、仲夏旭水氏
と湘南に遊び、曠日彌久、秋立ちぬ。今や燈火や
親むべし。則、所懷を陳べて、以て異邦篤學の
士に酬ゆる亦可あらばや。他山の石以て我が玉と
攻くべし、乞ふアストン氏に聞かむかな。

アストン氏の源語論を評す

梅澤和軒

(坤)

アストン氏(のみならずも)の源語論、多く本居
氏に據る。故にアストン氏のより、本居氏のを引
けば、餘す所ハ、そも幾何ぞ。されど、コンマな

く、ビリオドなき、蚯蚓の如き中古文と操つること、異邦人にどりて、如何に困難あるかと思へば、吾人の、氏の典據の正しさを稱せざるを得ず、而して、彼女と以て、英國の作家と比較せる所、此れ、やゝ耳と傾くべし。吾人の順序に、氏の比較論と見、さて後、末松博士とアストン氏との源語譯の優劣に及ばむと。氏曰く

(一)源氏物語は、一個の小説あり、此の種の文學に秀でたる女性にとりては、敢て珍と爲るに足らざと。然り源語の小説なるは、教育ある人士の疑はざる所あるも、儒佛に媿したる輩、今亦是牽強附會の説と爲る、憐むべし。氏は此の見地に立ちて、式部の天才と論ぜらく。

(二)彼女の天才は、ヒールチングと同代の大家、リチャードソンに似たりと。そもく氏の著たるや、邦文と知らざる英國の讀者に、日本文學と紹介する者、アストン氏は、喋々として、リチャード

ドッソンの特質と説くと要せど。されど、彼女、如何ある点に於て、ヒールディングより、リチャードソンに似たりと云ふか。「バメフ」の作者が、教訓的ある点に於てか、或、餘りに煩瑣冗長、尋常讀者と飽かしむる点に於てか。あらむ、只其の、眞の寫實小説と創始して、女性の描寫に妙ありと稱へてあるべし。此等の諸点、あは含糊模稜、著者、もし、一步を進めて、「バメフ」と「空蟬」とと比較し、東西兩作家の、類似と差異とに論及せば、錦上花と添ふるの觀ありしあらむ。東西作家の類似と説いて、而して精細ならざる、此れ望外の嘆ある所。又曰く

(三)源語ハ、言葉の最もよき意味に於て、寫實的ありと。所謂寫實と云ひ、理想と云ふに語弊ありて、前者の寫實的とあり、後者の概念的に流る。詩中に興らしと有り、小説の極致と得たると云はひとて、「言葉の最もよき意味に於て」と云へる

あるべし、三上、高津氏等の文學史に、「此の書は、式部が當時平安城裡の實相と寫し出でたる者なれば、完全ある我が寫實流小説の、最も古くして、且つ最も巧みある者あるべしと斷じ、更に、式部の寫實より入りて、理想の境に進みたる者ある事と知らざるべからざと。

云へるに比して、吾人の、アストン氏の賞翫力を稱揚せざると得ぞ。

(未完)

次に其文脉と論じて云はく

(四)源語の文脉の虚飾(ornate)ありと云はる、此の性質形容詞と用ひたる作者の、恐らく、宮廷的敬語の、處々重荷となれると考へしあらむ。されど、此の大に恕すべきことなり。源語の貴族的生活の小説あり、其の人物の多くの、種姓貴族に生れ、此等の人物の言行を寫すに當りて、宮廷的文脉と用ふるは、萬、止むと得ざる所。かゝる文脉の精巧ある儀式的、嚴且つ煩ある風俗と、時の日本朝

廷の、むしろ、華奢ある生活とに似たる者多し。
此れなくば、源語の文脈の、ロビンソンクルー
ーよりも、虚飾ならざと、

歐洲の日本學者にして、敬語の多きと見て、源語
の文脈と、虚飾と斷ぜるの、國脈と時代と知ら
ざる者あり。敬語の豊富なるの、古文の特質、國
脉の精華、王朝小説の避け難き所、其の煩瑣往々
厭ふべきも、源語の作者の、貴族的な生活と寫實せ
る結果として、彼の敬語と使用せるもの、用ふべ
からざる所に、用ひたるにあらざして、言々適切
動かしべからざる所にあり、即ち形容詞と疊重し、
比喩と過多あらしむる者と同日の論にあらざ、源
語に此の如き、ことくし、わざとらしむる。
源語文脈の虚飾と云ふべからざる、既にアストン
氏の説の如し。萩原氏も

唯、一どわたり、書かれたる物にあらで、
其の事を記しそむる始めより、くさくの法則
を思ひ構へて、書れたるものと覺しければあり。

と云へるにて、其の文脉の所謂虚飾あらざると知るべし。

されば虚飾と云はむとする者の本意は、其精緻の弊、時に (dulness) とされるを諷するに非ざるか。

源語の文たる、縷々として、春蠶の糸を吐くが如く、浮々として、雲岫と出づるに似たり。艶麗細

緻、日東別に乾坤と開きたるも、争ふべからざる

文脉の人に存する (Style is man) ことなり、

其の奔放の氣ある所、此れジョージ・ブーケー氏

(George Bonquet) が、「彼の煩はしき、日本のス

ピーデーリ」(cette ennuyeuse Scudéry Japonaise)

として、排斥したる故由にて、論者の本意も、亦

此處あらざるか、單に敬語の夥多と云々とするが如

き、云ふに足らざる。

次に氏は、此れあくは、源語の文脉は、ロビンソ

ンクルーソーよりも、虚飾あらざるべしと云ふ。王朝的

煩瑣は、源語より去るべからざるもの、而して、

氏は「此れあくは」といふ、假定既に事實と反す、

斷案亦非あらざるをえぞ。

よしや、一步と譲りて、

シルーソーよりも、虚飾あらざるとも、吾人の

今少しく、評論の精密あらひと望む。そもデフォ

ーの文たる、其の想像の、藝術家のにあらで、事

務家の如く、事實と挿入し、摺摺し、雜然統一あ

く、小説に於ても、其の報道の歴史の如く精密、

彼、年所と記するや。必ぞ、何年何月何日何時と

し、風伯と敘するや、常に、其の東北、西南又の

西北あると云ふ。嘗て其の著に序して曰く、「著者

の、事業の正史にして、作中毫も、小説的現象な

きと信ぜ」と、斯の如き人の如何なる文藝を爲すか

の、問はせして明あり。織計小談の、精細綿密と

同じからず。いやしくも、詩的想像あくして、而

して織計し、小談する者の虚飾とあるの、瞭然

と見るが如きも、假りに王朝的煩瑣と去りたる源

語の虚飾からざるを稱するのみあるの、知らざる

者或の東西の作家が天才の種類と同視する恐れを

語の虚飾からざるを稱するのみあるの、知らざる

者或の東西の作家が天才の種類と同視する恐れを

語の虚飾からざるを稱するのみあるの、知らざる

者或の東西の作家が天才の種類と同視する恐れを

さか。吾人の、アストン氏が、兩作家の寫實小説、性格小説の端緒と開きし点について、或い其の作風に就いて、一層精嚴に論ぜしならむと信じたり。其の著と讀むに及んで、昨非と悟りぬ。

又曰く、

(五)日本の記者等、源語と以て、佛敎の敎理を布演し、或い孔敎的道德と敎ふるものと爲す。吾人の、此處に此れを辯論し、若くは、其封せられたる小説(a novel a tale)たる暗示と以て、又い作中の人物の、當代の人々と一致せりあを云ひて、吾等自らを煩を要せず。本居氏の、いと正しく觀せられたる如く、おしあべたる説ども、實社會の再現に因りて、吾人の同情を感激し、趣味し、

娛樂する小説作法の、眞諦と知らざるを示す。

よいか言や。

近頃、還俗僧織田得能氏、「大帝國」に於て、源語と論ひて云はく、

女史は此の者が、世潮に感染して、筆端搖風と

帶ぶるやうの不見識の事あるべきや。凡そ佛か
く人と濟度するに、欲の釣を以て、之と釣そ
と云ふことあり。觀音が三十三身を現する中に
、女子の身と現して、欲の釣をとり玉ふこと
あり。尙法華經に、佛の深く衆生の欲世に達
せんと云へり。女史が造詣の深き、能く此理に達
し、欲の釣を以て、之を釣せむとの手段に出で
しのみ。女史が本領の、蓋し此に在り。云々
此等の源語製作の動機如何を考究せど、徒に妄想
と逞うとするもの、揣摩憶測、獨斷も亦甚し。氏
なほ、步武と進めて云はく、

聊かにても、儒者流の思想をらしめ、務めて
嚴肅ある筆を振ひ、此嬌風を矯正せむ事に汲々
すべし。然るに女史の本領の之と異あり。嬌風
其まゝを化して菩提となさしめむと欲し、故さ
らに、かゝる宗教小説を作りて、當代の縉紳と
勸發せしものにゐん。則煩惱と其まゝ菩提の種
とせむ方便ありかし。深く圓融の妙義に達する
者にあらざれば、能はざる手段にこそ。(圈点原
文のまゝ)

と、異邦人の一笑と買はせし幸あり。而して、氏
の「此趣向と主意とより云へば、此物語の、純然
たる宗教小説たること、畧了解し得べし」と云ひ、
最後に、「さても源氏物語と名けて、宗教小説と云
ふの、余が創意にかゝる奇稱あるがごとく、志揚り
氣満ちたるも、遼東の白豕敢て珍しきにあらず。
知らざるや、潮東故虞淵超然師が、丁寧親切に評論
せると、加之古來佛眼と以て源語を見たる者、何
れか足下と同地に立たざる。作家の理想と描寫の
才とと混同するの非あるの、少しく文學眼ある者
の、おしあべて左袒する所、足下曰く「源氏物語
の、一雙の佛眼と要す」と。吾人の云はむ。源
語の評家の、佛眼を有すると同時に、文學眼と
有せざるべからず。佛眼ありて、文學眼あるもの
の、文學眼ありて、佛眼あるもの、俱に其の
評家たるに適せざと。

筆や、岐路に入れり、五十四帖の、今を以て源氏の
評に接せざる点多し。吾人のアストン氏の「本居
氏の轍とふみ、作家と宗教との關係」は、寫實

小説の功過に言ひ及ばざるを惜む。佛眼を以て源語と評したると斥くるのよし、並せて、作家の理想、信仰とも非ざる未だし。さもわれ (a novel as a story) といふ奇しうな文はしるべきなり。(未完)

終りに臨んで、末松博士の英譯源語と、氏のどを比するに、博士の、邦文に近く、アストン氏の、此れに反す。前者に和臭ありとせば、後者の意譯に過ぎたる所あるべし。一言以て此れと覆へば、彼の國文に近きだけ、それだけ英文に遠く、此れの國文に遠きだけ、それだけ英文に近し。左に二の例をかく。

(原文)、つれと降りくらして、まゆやかある宵の雨に、殿上にも、ととく人ぞくちに、御宿直所も、例より長閑やかある心地するに。

(末松譯) It was on an evening in the above mentioned season. Rain was falling dearly. The inhabitants of the Palace had almost all retired, and the apartment of Genji was more than usually still. (A 氏譯) It was an evening in the wet season. Without, the rain was falling dearly, and even in

the Palace hardly any one was to be seen. In Genji's quarters there was an unusual sense of stillness.

The inhabitants （人々） 云々も末松博士の言はれたるより、（人々） アストン雖の even in the 云々の方々ロザア
ふあり。inhabitant （人々） ヌビズ字、何となくとかしく
聞ゆ。又 apartment （部屋） ヌビズ字、quarters の方
御宿直所と云ふに近き心地す。

（原文）、御殿油近くて、書物もあつて見給ふついで
に、近き御厨子ある、色々の紙する文をもと引お
出で、中將わりなく、おかしかね、ありな
き少し見せむ、かたはあつてもこそ、許し
給はね、其のちあつて、片腹したしも思はれ
ひこそのかしけれ。

（末松語）、He was engaged in reading near a
lamp, but at length mechanically put his book aside,
and began to take out some letters and writings
from a bureau which stood on one side of the room.
To-no-Chinjo happened to be present, and Genji
soon gathered from his countenance that he was

anxious to look over them.

but at length.....aside. くらひつを讀しなむてい、
some letters and writings. しのふにひつて、 田々の
紙ある綴書（しゆしよ）の書明（しやうめい）ありや、ハバト、ハ氏の如く、some
letters written on paper of various tints. しのふに大
あらふにふく。 ちや、 田の、 田の、
(ハ氏註) He was engaged in reading by the light
of a lamp when it occurred to him to take out from
a cupboard which was close by some letters written
on paper of various tints.

(はに明田の)
本紙に讀む)

其の他、 「若紫」の「日もさし長を徒然あれ」以下
の文とも比較するに、 アストン氏の譯に優れりと
す。 又其の節の後ある和歌は、 誤解せられたる
し。 歌は左の如し。

生ひ立たむわりかも知らぬ若草を

あくらと露ぞあふんくらあふ

博士に、

“The dews that wet the tender grass,
At the sun's birth, too quickly pass,
Nor e'er can hope to see it rise
In full perfection to the skies.”

此の歌の、紫上の行末を思へば、尼の自ら安心して先に、死に難きと述懐したるあり。「消えむ空あり」が、一首の主眼あり。然るに博士の「若草とるほす露の日出づれば、いと早く消ゆ」とせられたる如何、流石に異邦人の

「There is no sky (weather) to dry up

「The dew [of my tears] at leaving behind

「The tender herb

「That knows not where shall be its abode when it has reached full growth.'

とどさせり、吾人のライミストあらねば、詩の平仄に就いて軒輊せざ、只其の意味の正否を云ふのみ。此れを要するに、源語の作者と以て、眞の寫實家とあし、源語を以て寫實小説と斷じ、其の女性の描寫に妙ある、リチャードソンに似たる者あるを稱し、煩はしき日本の「スクーデーリ」をして、此れと排斥したる、ブーケー氏と駁し、彼女の文牀の、虚飾あらざるを辯じ、儒佛に偏したる、日本の評家を笑ひたるなど、氣焰恰も虹の如し。

さりながら、獨、本居氏と典據として、「源氏評釋」を知らざる（？）の觀ある、源語の綱概の何如を云はざる、リチャードソン、デフォー等と比較して、而して精細あらざる、九仞の功と一簣にかくの感ありて、佛儒アーンが英文學史の、特種の見地と有し、見識卓犖、筆法銳利、庖丁牛と解くが如くあらざるも、而も行文流麗、評論妥當、東京時代と除けば、東西を通じて、既出の文學史中の白眉たり。黒闇々たる、歐洲日本文學研究者派に、一道の光明と與へたる、勇氣と手腕と、苦心と熱心と、吾人の等しく三嘆する所、況んや、

身遣外の臣とあり、縱横論策と畫し、實務に執掌する傍、よく學術に貢獻する所あるに至りては、帝國の公使館員等が、菜色饑寒費の少さと嘆ぜると同日の談にあらざ。吾人、英國の政事家と、我邦のどと比するに、我の無趣文盲の多さ、文壇未だ對等條約と爲すに足らざと考ふ。

新條約の實施せられむと云や、新橋橋畔白衣の
查公あり、行人と誰何して方向を示しぬ。賢相明
徳思へらく、此れにあらざれば、以て文明の盛と誇
るに足らざと。何ぞ圖らむ。一國の文野の、道路
の肺裁にあらざして、教育進歩の度にあらと。含
雪將軍よ、區々行人と指揮して、文化と高うとる
と務めざれば、その後昆の笑と如何。アストン氏の
に優る好文學史の出づる、そも何れの日ぞや。
フルテトア曰く、いみじき批評家の、科學に精し
く、趣味と高く、偏見なく、猜疑あからざるべから
ざと。吾人務めて偏見を去り、又毫も猜疑の念あ
しど雖も、科學は暗く、趣味に低し、而して、猥りに
青白の眼を爲す。文章足らざる所いと多かり。異
邦篤學の士、希へい説せよ。妄評多罪。(完)